

## 下高宮を中心とした辺津宮境内発見の祭祀品について

福嶋 真貴子

宗像大社所蔵品には下高宮など辺津宮境内で発見され伝世した祭祀品があり、これらは宗像大社三宮での祭祀成立を解明する上で重要とされている。本稿では同祭祀品のうち未報告の資料を中心に紹介したい。なお、辺津宮境内各所の位置については、第1図を参照されたい。

### 一、上殿出土品

上殿とは宗像市田島の小字の一つで、辺津宮社殿裏の丘陵高宮から北西にさし出た一帯をさす。中世には辺津宮の主要な社殿（第一宮、第二宮、上高宮、下高宮、内殿、濱宮）が展開し祭祀が営まれ、最も神聖な浄域であった。上殿出土品には土師器三点がある。土師器甗ミニチュアか、把手付き鉢【第2図―1】は残存長八・〇cm。口縁部の六分の一程度が残存。体部は丸みを帯び口縁部は強く外反し、端部を丸く収める。把手は小さくつまみ出し、内面には接合時の強い押し付けによる窪みが残る。土師器鉢【第2図―2】は口径一一・八cm、器高八・五cm、頸部径九・八cm、胴部最大径一〇・三cm。口縁部の一部を欠くがほぼ完形品。体部は丸みを帯び口縁部は大きく開いて

端部を丸く収める。体部外面はやや雑な手持ちヘラ削りを施し、他はナデで仕上げる。四世紀後半から五世紀前半にかけての所産か。土師器高坏の脚部【第2図―3】は残存長一五・〇cm、基部径三・五cm、脚部高一三・一cm、脚底径一三・四cm。坏部は欠損するが脚部はほぼ完形品。脚部は長く中空で、裾部は發状に屈曲し端部で立脚する。三方に円形透かしを穿ちヘラ削りで丁寧に成形する。古式な様相を残すがいわゆる宗像型土師器高坏の例で、六世紀代か。

以上の土師器三点は、ひとまとまりで保管されてきた。甗ミニチュア（あるいは把手付き鉢）と鉢は、土器にある注記により上殿出土が明らかなのであるが、高杯の脚部は来歴を示す情報がないため、上殿出土の可能性をもつものとされている。

### 二、高宮出土として伝世する品

高宮とは小字上殿のうち、辺津宮社殿裏、南南西にある丘陵をさす。丘陵の南側の高い方が上高宮、北側の一段低い方が下高宮である。上高宮は

もとは古墳で、江戸時代、本殿地下から石棺や鏡、武器などが発見され、

五世紀前半代に比定されている（『宗像沖ノ島』本文四五七～四六〇頁）。

下高宮は現在、高宮祭場とされている所で、その丘陵上の台地からは、大量の須恵器・土師器、無数の滑石製白玉・円板、土製丸玉、滑石製人形二点・馬形一点が発見されている（『宗像神社史』上巻、一八頁）。伝世品は滑石製人形二点・円板一点・大形有孔円板二点・不明品一点、滑石製品残欠六点である。このうち、滑石製人形二点は下高宮附近出土として、滑石製大形有孔円板二点は辺津宮附近出土として報告されている。（『沖ノ島』本文一九五頁、第八二図―四・五・一二・一三）。未報告品で注目すべきは滑石製不明品【第2図―4】で、全長五・八五cm、最大幅二・八cm、最大厚一・五七cm。欠損のない完形品で獸形状を呈するが何を模したのか判らない。刃部を欠く刀子などの柄部のようにでもある。茎状部分には方形の突起が二ヶ所、目釘のような両側穿孔が一ヶ所ある。

### 三、医王院裏出土品

下高宮西南の斜面、小字上殿の医王院裏（俗称寺下）から滑石製白玉と平玉（円板）各数千点、滑石製舟形三点、滑石製大形円板、鉄片、土師器・須恵器が発見されている（『宗像神社史』上巻、二四頁（註五）、『沖ノ島』二一六頁）。現在、当該品として滑石製舟形三点がある。下高宮での祭祀に近い内容と年代とみられる。

### 四、辺津宮境内出土として伝世する品

勾玉（瑪瑙製二点、滑石製四点（うち一点は未成品）、ガラス製一点）、ガラス玉、滑石製白玉（算盤玉形・太鼓形・未製品がある）、滑石製馬形・円板・大形無孔円板各一点、滑石製不明品三点、滑石製残欠一四点がある。このうち滑石製馬形は下高宮出土（『沖ノ島』一九八頁、第八二図―七）、滑石製大形無孔円板は上殿出土（『沖ノ島』一九〇頁、第八二図―一四）、滑石製勾玉一点、滑石製不明品二点は辺津宮附近出土（『沖ノ島』第八二図―六・八）として報告されている。未報告品のうち、メノウ製勾玉【第2図―5】は完形品、片側穿孔。長さ四一・〇mm、厚さ一〇・七五mm、孔径一・六五～三・二五mm。滑石製白玉【第2図―6―15】は全体で五六個あるうちの十点のみ図示した。ほぼ同類型で、側面は研磨によって算盤玉状に稜線をつくっており、五世紀頃によく見られる小形の白玉である。直径四・五五～五・六mm、厚さ一・八～三・六mm、孔径一・一～一・八cm。

### 五、辺津宮第三宮址付近出土品

下高宮の北東方向にのびた台地の先端にあたる第三宮址近くの中殿山なかどんやまの小丘から、昭和十年（一九三五）の採土の際、変形獸帯鏡二面、滑石製短甲一点、土師器・須恵器が発見された。鏡二面は古墳時代の仿製鏡とされてきたが、近年、中国鏡（二面のうち、径一五・一cmの大形の方は魏晋鏡）の可能性も指摘されている（森下ほか二〇一〇、三一頁）。滑石製ミニチュ

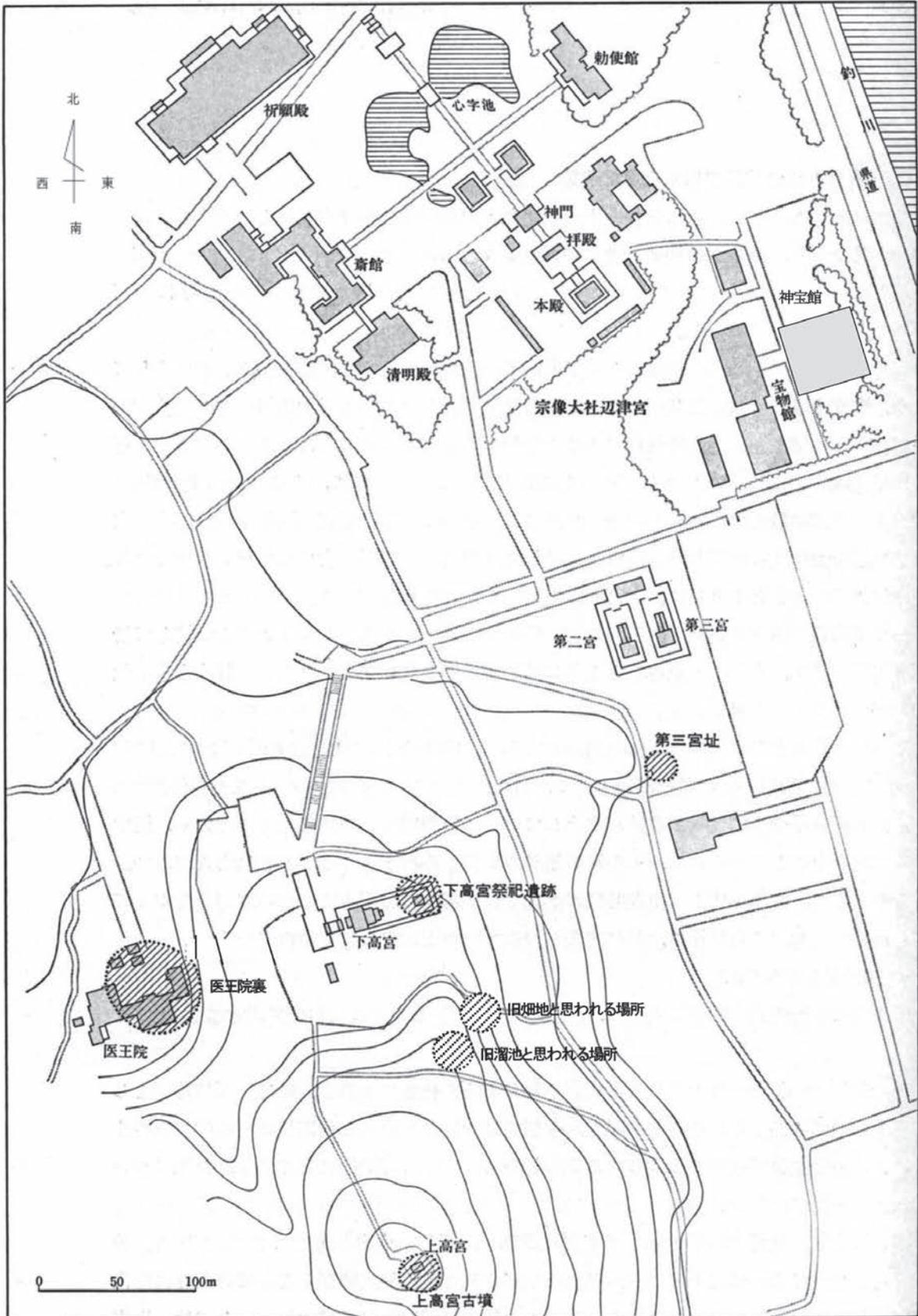
ア短甲【第2図―16】は五世紀頃の鉄製短甲を模した完形品。全体に丁寧な研磨が施されているが、前胴には削りによる微細なさざ波状の痕跡が観察できる。脇下は棒状の研磨具で円錐形に削り出しており、押付板部分にまで研磨痕が残る。高さ八・八cm、押付板幅七・〇cm、括れ部幅四・八cm、括れ部厚さ三・一cm、胸部厚さ三・八cm、裾部幅五・一cm、裾部厚さ三・五cm。類例は、祭祀遺跡では韓国竹幕洞祭祀遺跡、古墳出土品では栃木県雷電山古墳のみとされる。須恵器の横瓶ミニチュア品【第2図―17】はほぼ完形品で体部は扁平、平底で後円部は直状に外傾して大きく開き、端部を丸く収める。口縁部外面には二条の甘い沈線が巡る。胴部外面下半と底部外面は軽い手持ちヘラ削りを施し、他は回転ヨコナデで仕上げる。胎土・焼成とも良好・堅緻である。口径五・五cm、器高八・〇cm、底径六・九cm、胴部最大径九・六cm、頸部径三・四cm。時期は六世紀後半に比定できる。

### まとめ

高宮やその周辺で発見された宗像大社社外資料として、下高宮丘陵が畑地であった頃の溜池（第1図旧溜池）や下高宮周辺の畑地（第1図旧畑地）で採集した土師器、下高宮東の雑木林内で採集された器台と甕などを花田勝広氏が紹介している。花田氏は、溜池や下高宮周辺の畑地の土器は布留式最古段階、雑木林のものは八世代の祭祀品と見立て、上高宮の古墳を含めた下高宮周辺をとりまく遺跡は、下高宮土器出土地↓上高宮の古墳↓中殿山祭場↓下高宮・医王院の順で推移し、五世紀の中殿山の祭祀から八世

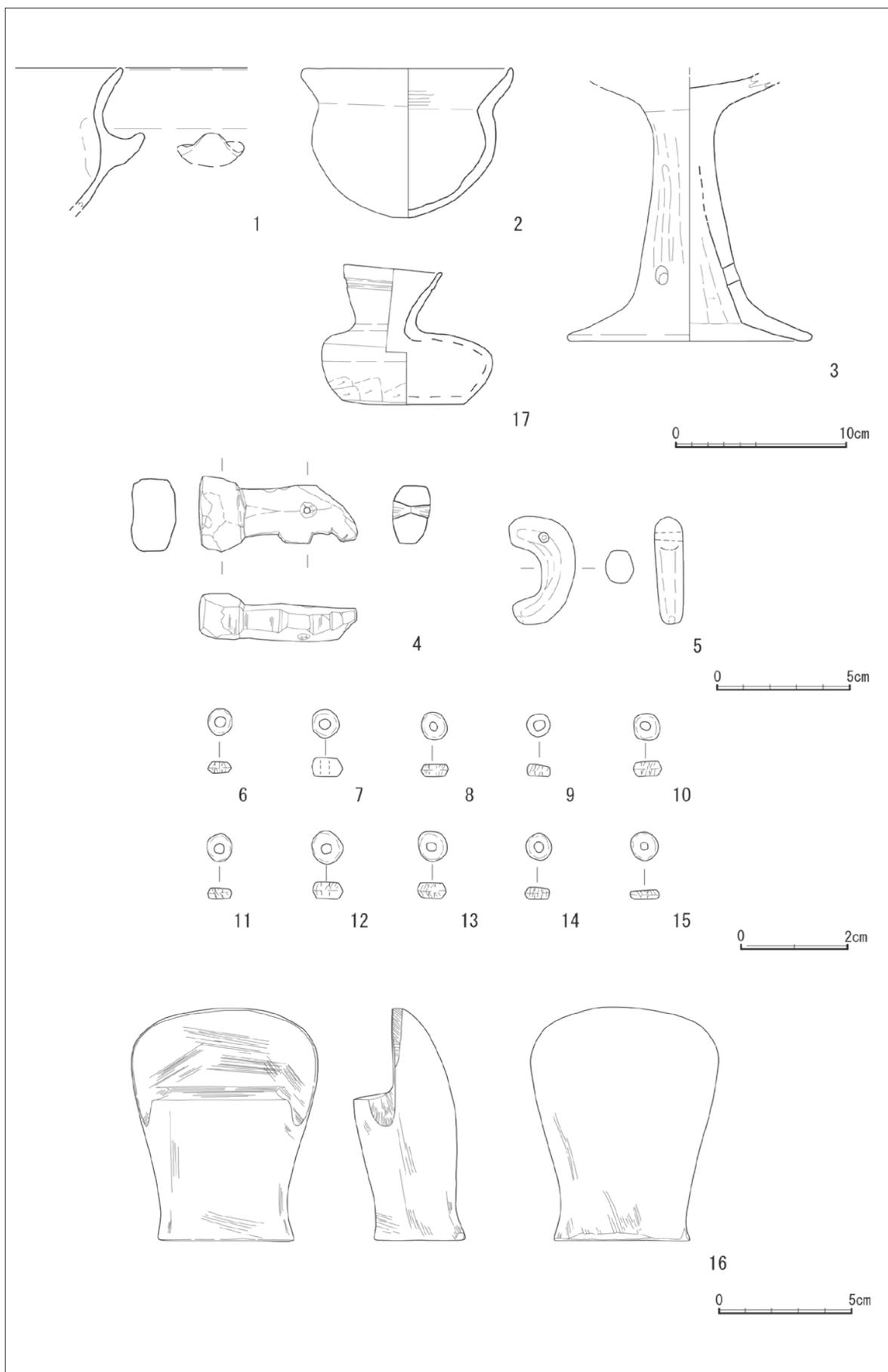
紀の下高宮周辺での祭祀まで連続で行われたと指摘する（花田二〇二二、四六―五一頁）。一方、小田富士雄氏は伝沖ノ島四号遺跡出土の壺（『沖ノ島』第九三―三）や大島中津宮境内貝塚出土土器（『宗像沖ノ島』FIG. 一五一―五）などの古式土師器の存在から、沖ノ島の国家祭祀の開始以前に、沖ノ島、大島、下高宮で土器を主体とした当時の在地首長（宗像氏の始祖クラス）による在地型の航海神祭祀を想定している（小田二〇二一、四九―五一頁）。

このような下高宮祭祀の先行研究で検討材料となった資料は、『宗像神社史』『沖ノ島』などの宗像大社刊行学術書で報告された出土品・採集品や、個人論考で紹介された採集品などで、数が乏しく、来歴や所在などの信憑性に疑問があるものも一部含まれ、実態解明を困難にしてきた。特に、沖ノ島国家祭祀開始前の時期（古墳時代前期）と古墳時代後期の資料は手薄で、学術的に取り扱えるものがほとんどなかった。今回、新出資料を提示したことで、考証の際に検討不十分であった部分を補い、研究を一層進展させる可能性がみえてきた。本稿で未報告資料として紹介した品のうち、上殿出土の土師器、辺津宮境内出土の古い時代の特徴をもつ滑石製白玉、第三宮址付近出土品などは、沖ノ島、大島、下高宮、三か所での祭祀行為が国家祭祀以前に求められ、三か所での祭祀が八世紀まで継続した可能性をさらに高めるものといつてよい。在地首長による在地の土器を用いる祭祀からヤマト王権による国家祭祀への展開の解明が今後の課題となるだろう。このたび、個々の資料や祭祀そのものの検討が十分にできなかった。大島中津宮境内関係品の整理公開と合わせて改めて試みたい。最後に、



第1図 宗像大社辺津宮境内図

(旧溜池、旧畑地の位置は小田2012、50頁、第5図下高宮遺跡位置図をもとに図示)



第2図 遺物実測図 (1 ~ 3・17 (S=1/3)、4・5・16 (S=1/2)、6 ~ 15 (S=1/1))

本稿を執筆するにあたり、白木英敏氏に御尽力いただいた。篤く御礼申し上げます。

(宗像大社文化財管理局)

## 参考文献

小田富士雄「沖ノ島祭祀の再検討」(『宗像・沖ノ島と関連遺産群』研究報告Ⅰ、二〇一一年)

花田勝広「宗像地域の古墳群と沖ノ島祭祀の変遷」(第十五回九州前方後円墳研究会発表要旨・資料集『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』同研究会、二〇一二年)  
森下章司、重住真貴子、水野敏典「沖ノ島出土鏡の再検討」(『考古資料における三次元デジタルアーカイブの活用と展開』奈良県立橿原考古学研究所、二〇一〇年)